

## 修士論文要旨

### 終末期方墳の意義について

別府大学大学院 文学研究科 文化財学専攻

M1413004 千原 和己

本論では、天皇陵の方墳採用時期に、九州の京都平野において、地方のものとしては規格外の墳丘を持つ大型方墳である甲塚方墳・橘塚古墳が築造されていることに着目し、地方において首長墳の墳形に方墳が採用されるに至った意図を読み取り、古墳時代終末期における方墳造営の意義を考察した。

京都平野に築造された 2 基の巨大方墳である甲塚方墳・橘塚古墳は、古墳時代後期末葉～終末期に築造された古墳で、前方後円墳の築造が衰退した時期に築造されている。また、甲塚方墳と同時期に、畿内において用明天皇陵とされる春日向山古墳が築造される。春日向山古墳の平面形は、それ以前の天皇陵に多く採用された前方後円形ではなく方形を呈しており、この後、推古天皇に至るまで 3 代に渡り陵墓の墳形は方墳となる。

方墳という墳形自体は、古墳時代前期から地方豪族の墳墓や、前方後円墳の陪塚として全国で築造されているが、天皇陵に採用された方墳と、旧来の方墳を同じ目線で扱うことはできないと考える。天皇陵に採用された方墳は、それまでの日本古来の墳丘墓とは異なり、大陸の墓制に系譜を持つ新式の方墳だと考えられ、この新式方墳の登場する時期に、地方での有力首長層の造墓形態も変化している。

甲塚方墳・橘塚古墳の所在地である京都平野を含む豊前地域においては、古墳時代後期以降、複数の首長系譜が確認されている。後期に明確な首長系譜がみられるのは、京都平野周辺では曽根平野のみだが、終末期以降は確認できなくなる。かわって、甲塚方墳および橘塚古墳の流れをくむ京都平野に首長系譜が確認できる。また、終末期における京都平野の古墳築造数は、他の周辺地域を大きく上回っており、8 世紀に豊前地域の国府および国分寺が築かれるのも京都平野である。

以上より、甲塚方墳・橘塚古墳が持つ意味を考えると、これらの巨大方墳が、豊前地域における支配体制の刷新時期に築造されていることから、中央政権と強い結びつきを持てた 2 つの首長系譜が、新たな政治体制に組み込まれたことを周囲に示す目的で、京都平野に巨大方墳を築造したと考えられる。

また、これらの事柄より、6～7 世紀の豊前地域における政治の中心が、京都平野にあったことが推察できる。宗教の中心施設である国府および国分寺が京都平野に築かれていることから、6～7 世紀において成立した地域間の関係性が、それ以降の時代にも反映され続けたことが推察できる。